

長栓の思った通り、汾河沿いの官道をまださほど行きもしないうちに、致庸は口笛を吹きながら鞭を奪い取ると、自ら馬車を御して道を逸れた。どこに行こうとしているのか悟った長栓は、腹もたつし気も急いたが、なすすべはなく、主人の好きにさせるしかなかった。しかしそれでもひっきりなしにぶつぶつと文句を言った。

「まったく旦那様ときたら、明日は大事な試験があるんですよ、遊んでいる暇なんかないんですからね！」

さすがの致庸もうんざりすると、長栓の頭上でヒュンと鞭を鳴らして笑った。

「長栓、そんな固いこと言うなよ、おまえだって行きたくないわけじゃないんだろ？」

長栓はぼつと顔を赤らめ、何か言い返そうとしたがぐつと堪えた。

致庸には馴染んだ道で、さして時間もかけず祁県きけんの県城けんじょうに入ると、ややみすぼらしい家の裏口で馬車を停めた。致庸は馬車を飛び降りると、慣れたそぶりで塙を乗り越えるための足がかりにする石を捜しながらぶつぶつとつぶやいた。

「江家はまったくだらしないな、この塙ときたら、随分長いこと修理もしないでこんなに低

くなつちまって、不用心極まりない。わたしが悪人でなくて幸いだったよ……」

大した苦労もなく致庸は塙を越えたが、塙の真下にはいつあいたものやら大きな穴があり、飛び降りた途端すぼりとはまりこんでしまった。さんざん苦労して「うーん、うーん」ともがいた末に、ようやく這い出すことができた。致庸は身体についた泥をパタパタとはたくと、コオロギの鳴き真似をした。長く二声短く一声、規則正しく鳴く。

ほどなく、脇部屋わきべやの二階からふたりの娘が飛び出してきた。先を走って来るのは広い額と切れ長の美しい目をしたとても綺麗な娘だった。薄紫色の普段着のひとえ姿が清楚な美しさを感じさせている。遠くから走って来るその姿を目にした致庸は、日頃へらへらしている柄にもなく思わず顔を赤らめたが、何気ないふりをして、尚もコオロギの鳴き真似を続けながら、わずかに背中を向けさえた。娘は致庸から十歩のところまで来ると走るのをやめ、しだいに歩みが遅くなる。後ろから来ていた小間使のなりをした娘が追いつくと、二人の様子を見るなり口元を覆ってくすつと笑いながら塙の向こうを見やった。

「雪瑛——」

致庸は堪えきれずに呼びかけた。呼ばれた雪瑛はピタリと立ち止まると、うつむいてほかに赤く頬を染めた。

「翠児、長栓は外にいるよ！」

致庸はカラカラと笑うと、外に向けて顎をしゃくって見せた。翠児はやはり赤くなつてうなずく。

「喬の若旦那様、ご機嫌よろしゅう。わ、わたし、外を見て来ます」

翠児はすぐに察しよく屋敷の外に出ていった。一つには主人たちのために見張りをするため、また一つには幼なじみの長栓に会うためである。かれら四人は幼いころから一緒に育ち、とても仲がよかった。

雪瑛は翠児の姿が見えなくなると、ようやくゆっくりと顔をあげて致庸を見た。

「どうして……どうして来たの？」

致庸は相変わらずニコニコしている。

「会いたいから来たんじゃないか？」

雪瑛はさらに真っ赤になった。

「嘘ばかり！ それに、表門から入らないで、子どもときみみたいに塀を越えたりして！」

もうすぐ挙人になるうかというお人が、もしうちの両親に見つかったら——」

致庸はやはりニヤニヤしながら間延びした口調で言った。

「きみによかれと思って塀を越えて来たというのに。もう雪瑛も大人なんだ、男女の仲にははじめがある。もしわたしが表門から入って来たなら、きみのご両親はきつと会わせてくれなかつたよ。そのときになってわたしに会いたいと焦れたってもう遅いんだよ」

雪瑛は腹がたつやらおかしいやらで、フンと舌打ちした。

「いい気にならないでちょうだい、どうしてわたしが会いたがるなんてわかるの？」

致庸はわざときまじめな顔を作った。

「喬致庸がその程度の自信すら持てなくて江家の裏の塀によじ登ったりすると思うかい？ 江雪瑛が毎日毎日自分のことを想ってくれて、気にかけてくれて、とりわけここ数日ずっと会い

たいと想っているのがわからないようじゃ、一体何を学んできたっていうんだ？ 何が挙人の試験だ？ もしわたしが受からなかったら、媒酌人を立てて江家に結婚の申し込みができるかい？」

「い？」

雪瑛は驚喜のあまり、一瞬体裁も忘れて熱心に尋ねた。

「なんて言ったの？ 媒酌人を立てるって……結婚の申し込みを？」

致庸はわざと雪瑛をからかってとぼけた。

「そんなこと言ったかい？ おかしいな、どうして記憶にないんだらう？」

「あ、あなたって——」

雪瑛は恥ずかしいやら腹立たしいやら、致庸を僕とうと手を挙げたが、致庸にその手を掴まれた。慌てて手を引き戻そうとしながら小声で叱りつける。

「放しなさいよ、いやな人、だれかに見られたらどうするの？」

致庸はちやつかり手を握ったまま小声で懇願した。

「雪瑛、わたしが兄さんと嫂さんに何と言ったか知りたくないかい？ もし知りたいなら、わたしと一緒に来ておくれ！ 素敵な場所に連れて行ってあげるよ、ほんとうに、ほんとうに、ほんのちよつとの時間だよ、すぐに家に送り届けるから、今日はとてもいい天気だしさ」

初めのうちこそ手をふりもがいてかぶりを振っていた雪瑛だったが、女の一生に関わる大事なことであり、その子どもっぽい懇願に負けて、最後にはうなずいてしまった。

足早にふたりが裏庭を出ると、長栓と翠児が小声で話をしている。致庸がいたずらっぽく空咳をすると、二人はぱつと顔を赤くした。雪瑛は急ぎ足で翠児に近づくと何やら耳打ちした。

翠児はいささか不安げな様子だったが、耳元できんぎん雪瑛が頼み込むので、ようやくうなずき、頬を染めてちらりと長栓を見やると急いで中に戻って行った。

馬車はあつという間に街を出て、十字路に行き当る。長栓が幌馬車の外から尋ねた。

「若旦那様、どちらへ行かれますか？」

致庸はしかめっ面をしてみせた。

「何がどちらへ行かれますか、どこに行くべきかもわからないのか？」

幌馬車の外の長栓はちよつと首を傾げると、すぐにケラケラと笑って鞭を鳴らした。

「わかりましたよ！ よし、行け！」

雪瑛はずつと手をよじりあわせて座っていたが、突然嫌な予感がして外を見た。たちまち色を失って叫ぶ。

「致庸、どこに行っているの？ これって、太原府に行く官道じゃないの？」

致庸はわざと空とぼけて窓布をまきあげて外を見た。

「おや、こいつは太原府に行く官道なのかい？ 長栓、どうして太原府に行く官道なんか走っているんだい？」

長栓が答える前に、致庸は窓布を下げて雪瑛を振り返った。

「しょうがない、もう太原府に行く官道を来ってしまったんだから、一緒に太原府へ遊びに行こうよ！」

雪瑛は顔を曇らせ、じつと致庸を見つめると押し黙っている。致庸はその顔つきに、あまりにもはしやぎすぎたと気づきポリポリと頭を搔いた。